

受贈雜誌

(六五年一月から十一月まで 順不同)

- 国文(お茶の水女子大) 2223号 国学院雑誌65巻8号
- 66巻1号10号 試論(武蔵野文学会) 80号 説林(愛知女子大) 13号 愛知女子大紀要15輯 高葉545556
- 57 国文学解釈と教材の研究10巻3号13 国文学論考(都留文科大) 12号 帝塚山短大紀要2号 国学院大学紀要5号 中国古典研究12号 近世文学研究(北大) 1号 国語と国文学42巻2号11 鶴見女子大学紀要2号 国語国文34巻1号10 文車(阪大) 12号 軍記と語り物2号 古典遺産5号14号 文学33巻2号11号 国語国文研究(北大) 293031号 都大論究4号 文芸と批評69号 学大国文(大阪学大) 8号 学術研究(早稲田大学教育学部) 13号 日本文学(東京女子大) 24号 言語と文芸(東京教育大) 374041 文芸研究495051号 国文学(関西大学) 3738号 清泉女子大紀要12 香椎潟(福岡女大) 10号 女子大国文(京都女大) 36373839号 文学論藻(東洋大) 293031 金沢大國語国文1号 立正大学国語国文4号 立正大学文学部論叢19 甲南国文12号 愛知大学国文学6号 金沢大学法文学部論集12号 文芸研究(明治大学) 1213号 東叢文学2425号 語文(阪大)

「たとへば」考

立証意趣の変遷に関連して

中世から現代まで

清水

功

一、はしがき
 中世、連語「たとへば」の用法に現在普通に見うけられる「たとへば」の用法とかなり異なるものがあつたことはすでに先学の御指摘がある。
 ところで今は、中世相当広いものであつた「たとへば」の用法を統一する語感、語意識をさぐり、そのような広い用法から、現在の例示の用法にほとんど限られてくる実態を調査し、その現象を通して、立証・解説の意識の変化を考察する一助にしたいと思ふのである。

分類的に言つて「たとへば」をおいて具体的実例を書き出す。「意味の重いもの」と「客観的に叙した事を、又他の一面からいふ時冒頭に接続詞として冠する」「意味の軽いもの」とに分けられた^④のは橋本純一氏であり、徒然草の例の他に平家物語の例をあげておられる。
 また、金田一春彦博士は、平家物語において「接続詞の数がふえてきているが、今より一般に意味が漠然として」いることを指摘され、「例へば」の用法の例として、比喩と考えられるもの他に「ソノ内容ヲ具体的ニイウトの意」と「手ツトリ早ク言エバの意」をあげておられる^⑤。

二、中世における用法
 連語「たとへば」について一般にいわれる「譬喩・例示・仮定の意」の他に「説明の意」を指摘された^③のは、松尾捨治郎博士であり、平家物語、天草本平家物語より例をあげられ、後、書込み増補の中に舞の本の例をあげておられる。
 更に、「現今の「たとへば」と意義を異にした例」を

また、多屋頼俊博士は「歎異抄」の訳註において「ものに譬えていえば、という意味ではなく「先ず」という意味の発端の語 である」として、平家物語・徒然草の用例をあげておられる^⑥。
 さて、以上先学の御指摘により、連語「たとへば」は

中世には現在より相当広い用法をもつていたことが明らかになつたのであるが、今、用例を若干つけ加えて、中世の「たとへば」の底を流れる統一的な意義をさぐりたいと思う。

A、説明

(イ) 具体的なことがらを詳しくのべることによつて提言を解説し立証する。

1. 「浦の物どもおほふ候へども、案内しつたるはまに候。このおとこそよく存知して候へ。たとへば。」

(平家物語下二九四)

2. 可キ案、前句、又案すまじき前句などの事、いかやうの時の事に候哉。答へて云はく、たとへば、歌に百首の題をとりて、甚俊、俊頼などは……吾妻問答二三四

(ロ) 理由・原因をあげて提言を解説し、立証する。

1. 中将も「燈籠しては、数行貞氏の涙」といふ朗詠をぞせられける。たとへばこの朗詠の心には……

(平家物語下二六五)

2. 名月女の御方へふしぎのたよりぞ候ひける。其故いかにとたづぬるに。たとへば津の国。わたなへちかきかむぎきに……

(舞の本、築島一六一)

(ハ) 以上の中で、特に提言よりも解説・立証の部分に

後にむまるるを弟とするばかり也。誰か天下をしらんにしらざるべき。

(平家物語下三六四)

2. たとへば時致は。後に生れしばかりなり。正しく同じ子の身にて。御おほえあし垣の隔あるこそ悲しけれ。

(謡曲、小袖曾我)

以上の他、管見にふれたものでこの類と考えられるものを次にあげる。

平家物語上四〇三・下一五二、徒然草一九〇段、風姿花伝三九二、舞の本一〇六・一五二・二七六

C、比喩

(ホ) 異なる種類のものとの類似点をもつて、提言の根拠とし、あるいは解説のたすけとする。(類似点以外の点はむしろ大きく異れば異なるほど効果的であるという一面もある。)

1. ただいまの入道殿下の御ありさま……ならびなく、はかりなくおはします。たとへば一乗の法のごとし。

(大鏡六〇)

2. されば天下を保ち国土を治る謀こと、文を左にし武を右にすところそみえたれ。……は人の手のごとし。

力点がおかれ、提言は単に解説・立証の部分を通しての事実の開陳の先駆となつてしまつたものがある。

1. 入道相国……人の嘲をまかへり見ず、不思議の事をのみし給ひけり。たとへば、其頃都に聞えたる白拍子の上手、祇王祇女とおとといあり……(平家物語上九四)

2. とり分この修業者の。ゆらひをくわしくたづぬるに。たとへば津の国。なには入江のみつまつ……

(舞の本、築島一五八)

以上の他に管見にふれたもので「説明」と解すること

ができると思われるものを次にあげる。(漢数字は頁数、同頁に二箇所以上の用例がある時は算用数字で行数を示す)

平家物語上二四五・四一七・四二二、吾妻問答二二三・二三四六、舞の本一六一・一六七・五〇三、毛詩抄一・二〇四・二二〇・二三〇・四〇九・三四八

B、警句

(ニ) 格言、俗諺その他気の利いた文句で、手短かに解説・立証する。

1. たとへばおなじ父が子で、先にむまるるを見とし、

(平治物語一八九)

この類は普通に見つけられるものであるので、他の用例はあげない。

D、例示

(ト) 同時に共存する(あるいは共存した)多数の同種のもの(あるいはことがら)より(たとえそれが最も解説・立証に便であつても表面的には)任意にとつて、それをもとに立証し、解説する。

この中、かつて「存在したとされるもの」からとりあげ、同時に「特に説明しやすい、あるいは相手を納得させやすい」特別の事例をもつてくる時、「故事、先例」という傾向があらわれ、現代の用法の「例示」とはや、性質を異にしてくる。

それと同時に、次にあげるような用例の場合、おそらく、当時は先の諸例との差別の意識はほとんどなく、みな「たとへば」の中世の用法の中で混然一体のものとして意識されているのではないかと思われる。(これは例証の意識が全くないわけではなく、現代に比較すれば、前の諸例との区別の意識が希薄であり、習慣化されていないが、必要な場合には他の表現をかりて表わすことが

できるということである。これは一例をあげれば、現代日本語では「牛」という時は牡牛か牝牛かを意識していないのが普通であるし、また一般には「牡牛」「牝牛」と分けて言うことは習慣化されていない。しかし必要な場合には二つを分けて表現することが可能である——という事情に似ているといつてよいであろう。

こゝろより面よりすれば、この用法は「説明」に非常に近い、あるいはその中に入れられるものであると考えられるが、今は、形の上からは「例示」とも解し得るものをあげて、大方の御示教をおおぎたいと思う。

1. かの本歌を思ふに、たとへば五七五の句をさながらおき、七七の字をおなじくつづけつれば、新しき哥にききなされぬところぞ侍る。五七の句はやうによりて去るべきにやあらん。たとへば「いその神ふるぎみやこ」……「たまほこのみちゆき人」など申すことは、いくたびもこれをよまでは歌いでくべからず。「年の内に春はきにけり」……「さくらちるこのしたかぜ」などは、よむべからずとぞをしへ侍りし。
(近代秀歌一〇二)

2. 本哥の詞をあまりにおほくとる事はあるまじき事にて候。そのやうは詮とおぼゆる詞二ばかりとりて、今の哥の上下句にわかちをくべきにや。たとへば「夕暮は

E、假定

(チ) 提言を解説・立証する為に仮定の条件をあげる。あるいは、事実の事柄であつても仮定し約束して議論を進展させる。

1. ただ愚めたとへば人の偽をかさねてこそは又もうらみめ
(新古今集一二二三番)

2. つぎに今の世に、かたをならぶるともがら、たとへば世になくとも、きのふけふといふばかりいできたるうたは、ひと句もその人のよみたりしと見えんことを、かならずさらまほしく思ふたまへ侍るなり。
(近代秀歌一〇三)

次のものも、この中に入れられるのではないかと思われる。
舞の本七五・一四四・一四七・一五九・一八四・五一二・五二五。

以上を考えあわせると、中世のこれらの用例に共通するところは外(言語行動の相手)にむかつては「解説・立証の為、かりに、他のもの(あるいはことがら)をあげる」という態度であり、実際にはむしろ「任意というよ

雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人をこふとて」と侍る哥をとらば、「雲のはたて」と「物思ふ」という詞をとりにて、上下句にをきて、恋の哥ならざらん雑・季などにてよむべし。
(毎月抄 一三三)

3. 分句、たとへば(下句に)

あるる里にも海士やすむらん
繫べき心なきかははなれこま

是、尤当世の連歌也、荒るるに駒、海士に心なき(と分て)付也、前句の心にはなけれ共ただ寄合(ばかり)を付渡る也、是等、分句なり
(知蓮抄一一九)

ただ、これらは一面「たとへば」以下をすべて「説明」(と見ることもできるのである。そして前述の通り意識の上で他の用法とはつきりわかたれていないとするとき、やはり純粹の例示とはいいかねるように思われるのである。ただし一面、おそらくは歌論の証歌の意識あたりに今日の例示の意識・用法がそだつてくる萌芽があつたのではないかということも示しているように思われるのである。

以上の用例の他、次のようなものが、この用例に似ているのではないかと思われる。
知蓮抄一一六16、一一八16、風姿花伝三八二。

りも特別の事例」をあげる方向にかたよつており、また発言にあつては「あらたまつた意識」が言語主体者にある時に用いられるという傾向があると思われるのである。
①

三、近世の用法

近世になると(特に中期以降)ほとんど比喩・例示・假定の用例にかぎられるようになる。またあきらかに比喩と例示を区別して表現しようとする意図がみとめられるようになってくる。

ここではまず、管見にふれた近世における比喩・例示・假定以外の用例——というよりも比喩・例示・假定などに他の用法がちがづいて行き、吸収されて行く中間的な用例をあげたいと思う。

1. 浮む心と云は、一陣に進出て、心を張掛けて持(たも)云なり。譬ば奉公人は、常に主人の前に出て、心を張掛、強く持て仕る処、是浮む心也。△説明↓比喩とも▽
(反故集二九四)

2. 明德仏性の修業を捨て、徒に外さまの修業をつとめて成仏解脱を求るは、たとへば木によつて魚を求むるがごとし。△譬句↓比喩とも▽
(鑑草五六)

3. 交絶不出悪声とは、たとへば人と交通して、其人

の悪事をいはぬは、もとよりの事なり。其人と中たがひては、己が是をいはんとて其人の非をいふべきに、交絶て後に其人のあしき事を一向に言に出さぬは、君子の忠厚人に^{そと}風かざるの心なり。△説明↓假定・例示とも▽

(駿台雑話 四三)

このようにして、説明、警句の用法は他の用法の中へ吸収されてしまうのではあるまいかと思われる。少くとも中世のような「比喻・例示・假定」のいずれにもあてはめがたいような用例は、近世以降影をひそめたといつてよいと思われる。

そして、「たとへば」の用例中で大勢をしめる「比喻」と「例示」を区別して表現しようとする意識が次第に強くなつていつたと考えられる。

1 道二翁道話

△比喻▽たとへて見れば(五六)たとへていへば(二六〇・二七一)たとへていはば(二六四・二六八)是をたとへて見ようならば(二七三)是をたとへて見ようならば(一六三)たとへば(七九・一一七・二一九・二二二等)

△例示▽其の一、二を挙げていはば(一七六)

2 古事記伝卷一了卷五

	書名	例示	比喻
啓蒙期	安故 盲反鑑	杖集草 000	4 2 2
前期	鉄仮名 葉隠 葉町 駿台	師語(喜慶話) 1卷 4卷 1人 雑	9 3 0 14
中期	役道古 尊記	論道(卷1~5) 翁(卷1~5)	2 23 3
後期	東翁道孟 関鳩武講	始話集話 事道初 余	0 2 0 6

(例示の用例は次の通り、葉隠上八四・一七八、町人一四八・一四九、役者論語二三、關東事始四八一、四九三、武道初心集五九・六三・六七・七六・八二・九六の諸頁)今比較の為「葉隠」中の例示用法二例と比喻用法の中の一例を次にあげる。

1 打ち果すと、はまりたる事ある時、たとへば直に行きては仕果せがたし、遠けれどもこの道を廻りて行く

△比喻▽物にたとへていはば(二二五)たとへば(九二・九四・九五)

△例示▽例を一つ二つ(八〇)其例を云はば(七六・八〇)其の例(七一・一・二)例によらば(七四)此例(七七)等。

以上のような場合、あきらかに意識的に対立させて用いていると思われるが、その他にも次のように両者を区別しようとする表現が非常に多くなつたと考えられる。

△比喻▽たとゆるに(町人書一)たとへて申さば(鳩翁道話二六)これを―にたとへたらんには(雲萍雜志九一)是を―にたとふるに(講孟余話五五)

△例示▽例として(駿台雑話二三五)当今の事を求て之を証せん(講孟余話八六)

また「たとへば」という連語自体にかぎつていえば、個人の文体的相違、ジャンル相違で大きく左右はされるが、大まかにいつて次の表のように、比喻に対して次第に例示の用法が確立してくるようになる。(假定と解せられるもの、例示・比喻どちらとも判定し兼ねるものははぶいた。)

べしなどと思はぬものなり。△例示▽(葉隠上八四)

2 勝茂公時代には風説書と申す物を差し上げ候由。たとへば何山を唯今の通り御伏らせなされ候ては、末々斯様の支所^{つか}これあるべき由。…など書き付け、差し上げ候由。△例示▽(葉隠上一七八)

3 私なく有体の智慧にて了簡する時道に叶ふものなり。鷗より見る時、根つよく髓かに見ゆるなり。たとへば大木の根多きがごとし。△比喻▽(葉隠上二四)

次に假定の例を若干あげる。
1 氣にて心のきれを助くるといふ事、よく体認してしるべき事にや。たとへばここに二人あり。極寒の時に…同じく起出るに、ひとり寒さを病んでおくるにものうく、ひとり寒さを事ともせず速に起く。(駿台雑話九八)

2 君子の論ずる所は心なり。譬ば今我れ巧言令色を以て人に親しまんと欲す。人必ず我を容れず。(講孟余話六二)

ただし、「假定」という用法は、「假定のもの(こと)」を解説・立証の為に提出する時に、假定の事ながら、それを多数の中の任意の一事例というように意識するよ

うになれば、遂には「例示」の中に埋没してしまふ。現代語においても、「これは「たとへば」の問題だがね、……」などという時はまだ「仮定」の意識が残つていようが、多くの場合は、仮定と例示の間は意識せずに用いていると思われる。近世においても、比喩・例示の間はいいわけの意識が働いても、例示と仮定、比喩と仮定との間をいいわけようという意識はそれほど濃厚ではなかつたのではないかと思われるのである。

四 明治以後の用法

近代になつても、言文一致が十分確立するまでは近世のなごりを受けて、例示・比喩両様に用いられている。と同時にここでもやはり、例示・比喩を弁別できるような表現を望み、また多く使用していることがわかる。

福翁自伝	浮雲批評 (10号~12号)	石橋忍月評
一例を挙げれば 八四六 其一例を申せば 一 八・二三四・二七 四六 其事実に現はれたる を申せば 二〇八 等	たとへば 一例 例へば 三四例	たとへていへば 三二 を——にたとふ ば 四一・六二・一一 四五・一一四六・一一 五六
	譬へば 一例 之を喩へば 一例	話をたとへて之をい へば 二一〇・二二二 等

論集	文明論之概略	例示	比喩
例へば 五例 例之は(たとへ三例 ぼと訓 むか)②	念の為 一・二例せ ん 一一八 又、一例を挙げて之を 云はん 一一〇・一 八二 一例を挙げて云はば 一九 尚、今実証を得んと 欲せば 一七四 等	譬へば 五二例 之を譬へば 一四例 譬へば 六例	例へていへば 三二 其趣を形容して云へ ば 一六二・一七八 べ ——を——にたとふ れば 四一 之を——に譬へば 三七 等

次に仮定と解しうるものをあげるが、これらも「たとへば」の使用にあつて例示の用法の意識が強く意識されるに従つて、例示と意識されて行くのではないかと思われる。

1. 例之は茲に曲中の人物が数等不遇不幸慘澹の境界にありと仮定せよ。(石橋忍月評論集一五〇)

2. 又徳義の行はるる所と規則の行はるる所と其分界を明にせんため左に一例を示さん……政府と人民との間にも……学芸を教ふる教師と生徒との間にも規則のみを以て相会するものは之を徳義の交際と云ふ可らず譬へば政府の官に同僚二人ありて甲は深く公務に心配して誠実を尽し……乙は然らずして……公務に差支あらざれば之を勉む可らず甲の誠意も光を顯すこと能はざるなり。

(文明論之概略一四四)

ところで明治以後は、次の表にもその一斑が示されるように(個人的文体の相違・ジャンルの相違はあるにしても)次第に比喩はかけをうすくし、例示の用法にかぎられてくるようになる。(文は文語文、口は口語文)

(文)は文語文、(口)は口語文

書名	発行年	例示	仮定	比喩
文明論之概略(文)	M18	52	3	6
石橋忍月文芸評論(文)	M20 ²⁴	5	1	0
浮雲批評(しらべ10号~12号・四巻全集)(口)	M21	1	0	0
福翁自伝(口)	M30	34	1	1
三太郎の日記(第二)(以下口)	T 3	1	0	0
惜しみなく愛は奪ふ	T 9	1	1	1
蔽紺子集	T12	1	0	0
標準日本文法(旧版)200P~220P	T13	9	1	0
柿の種	S 8	1	0	0
地図を眺めて(朝日新聞)	S 9	1	0	0
国語学原論 100P 120P	S16	9	0	0
現代日本の思想	S31	6	0	0
朝日新聞(抜粋)昭39.1~昭40.7		158	0	0

このように、全体とすれば「例示」の方向へむかつたと思われるが、ここでなお注目すべきこととして、ジャンル・文体によつてはかなりな頻度で「たとへば」が用いられていることである。文明論之概略も文庫、五べに一回、標準日本文法一二べに一回、国語学原論一二べに一回、昭39.3.29朝日新聞「私の読書術」(駒田信二氏)約六〇〇字の文章に四回——約一五〇字に一個の割りである。文明論之概略は比喩も多いのでともかく、全体として、例証意識の発達が生み出した一現象ではないかと思われる。

また別に、実例を多く引きながらも、「たとへば」の使用が非常に少ないものがある。先の表の「現代日本の思想」はその一例であるが、これは現今、立証にあつて実例をもつて示すことが当然の前提となつてきた為、「たとへば」を用いないでそのまま実例に入るといふ傾向があらわれてきたからではないかと思われる。そうしてそういう傾向の中では、次のような「例示」意識が端的にあらわれる簡略ないまわしものだけが残るといふ方向をとつていけるのではあるまいか。

1. 自由主義的西園寺の成立によせた彼の期待と、用心をかさねた書き方にもかわらず、書物は御用ジャー

ナリズム(たとえば『東京日日新聞』)の中傷的攻撃にさらされ、当局によつて、すぐさま発売禁止処分につされた。(現代日本の思想一四〇)

2. 「偉大さの内的条件」については、音楽的偉大さの要素としての天分のほかに勤勉さをもつこと(たとえばモーツァルト)、个性的であると同時に普遍性をもつこと(ベートーベン)、作品の領域の広いこと(バッハ)をあげている。

(昭和40.9.18朝日新聞「音楽の偉大さ」書評) 3.氏はさきに『ジャパン・クオーターリー』で発表した中国詩が日常性に富むということを説明して「私の日常性というのには実は西洋の文学を比較的媒介として、西洋のことを私はよく知らないけれども空想による叙述がしばしば地上をはなれたところをかける。たとえばダンテ」と言っている。

(昭和40.3.13朝日新聞「文学と文明」福原麟太郎) さて、かつては「たとへば」といふことは、相当あらたまった意識と共に用いられたと思われるが、現代では、相当クダケタ場合にも用いられるようである。

1. 目的地はどこにしようかと話し合った時も「湖のある所がいいな、たとえば十和田湖のような」といつて

いたのですが.....

(昭和40.4.4朝日新聞「旅・わたしの場合」投稿) 2. 私の父は、たいいていの品物の下に「こ」をつけて話した。例えば「あそこの娘つこはいい娘つこだが、まだこつこの犬つこをいじめているようでは、本当のいい娘つことは、いえないな」たいへん気嫌のいい時など父は、こんな風に云つた。私たちは、そんな時には腹をかかえて笑つた。

(「おもしろい話」畔柳二美「言語生活」昭和三十年七月)

五 結 論

(1)、中世多彩であつた「たとへば」の用法中、「説明」の用法は、近世(特に中期以降)にはほとんど見うけられなくなつた。

(2)、「警句」の用法も近世に入つておとろえた。
(3)、「比喩」の用法は、中世・近世を通じて盛んであつたが、明治以後次第におとろえて、現在では「例示」とつてかわられた。

(4)、「仮定」の用法は、「たとへば」以下の内容の提示の仕方にも関係するところで、痕跡的に現代まで残つ

ている。

(5)、「例示」については、中世においては「例示する」という意識はあつたであろうが「たとへば」の語意識としてはもつと広いもので、多くの用法の混然としたものであり、「たとへば」の語意識としての「例示」の意識はそれほど明確ではなかつたのではあるまいか。近世（特に中期以降）には比喩・例示の二つを意識的に分けて表現しようとするようになる。特に言文一致が完成された大正末期頃からは「例示」の用法が「たとへば」の用法の中心となつた。

(6)、全体に「たとへば」という語を發する時の意識は「あらたまつた」ものから「クダケタ」ものに次第にうつつて來つたようである。

以上、叙述が簡略なため諸先学の御説を引用することが少く、また礼を失する面が多々あることと存じます。繁簡よろしきを得ない点、考察の至らない点、説明不備な点もまた多いことと思ひます。よろしく御寛恕と御教示をお願い致します。

最後に日頃御懇篤な御指導、御鞭撻を賜つております

金田一春彦先生、松村博司先生、後藤重郎先生、尾崎光先生に厚く御礼申し上げます。

註

- ① 一語意識は中世すでに相当強いものと思われ、その面からは一語と考へた方がよろしかろうと思われ、以下多少「たとふれば」などと対比されることがあるので一応こう稱した。なお現代かなづかいではもちろん「たとへば」であるが通時的に考察する關係上、引用文を除き、原則として「たとへば」と記す。
- ② 松尾捨治郎博士説「国語法論攷」、橋純一氏説「つれづれ草通釈」、金田一春彦博士説「日本古典文学大系平家物語解説」、多屋頼俊博士説「日本古典文学大系親鸞集日蓮集歎異抄補註」
- ③ 「国語法論攷」二六五頁
- ④ 「つれづれ草通釈」下五七一頁
- ⑤ 「日本古典文学大系平家物語」上三六六頁
- ⑥ 「日本古典文学大系親鸞集日蓮集」二六二頁
- ⑦ ここでは便宜上、分類めいたことを行つが、もともと

と意識的には同一の語として使用されるのであるから二つ以上の用法にまたがつて解し得る用例もあらわれ、また、厳密な意味では分類しがたい。ただ後の変化への手がかりとして便宜的にわけて記したのである。なおとりあつかう語の性質上引用文が長くなるおそれがあるので、引用はできるだけ簡略にとどめ、または所在のみを示すようにした。（引用文献は小稿末）

⑧ この用法は現代の書きことばではまつたくといつてよいほど見られない。しかし、話しことばでは話線が流動して行き、先に「たとへば」といつたことを忘れ（あるいは無視して）話が次から次へと展開して行くこともないとはいえないだろう。

また、中世について考へるとき、これが会話の冒頭にあらわれ、また当時の相当気負つたい方であるという事が加味される時、多屋博士のいわれる「発端をあらわす」という面がでてくるのであろう。

⑨ 當時も——物にたとふれば（義経記二六三）物によくよくとふれば（舞の本一六三）——の如く比喩にのみ用いられる表現があつたところを見れば、弁別不可

能というわけではない。しかし、近世のように二つの間を意識的に分けて表現しようとする対立的に用いるところまでは進んでいない。

⑩ 上古の文学、中古のかな文学では「たとへば」という形式は管見にふれたものが非常に少かつた。

訓点語については、中田祝夫博士「古点本の国語学的研究」総論篇九二六頁、大坪伊治博士「訓点語の研究」二七六頁、築島裕博士「平安時代の漢文訓読語につきての研究」八三二頁・八三五頁に御論考がある。

「たとひ（副詞）」「たとひ（名詞）」「たとふ」とひ（副詞）」については訓点語の面から久米善正氏「『タトヒ』（仮使・仮令）についての一考察」

⑪ 時代別区分については、ここではかりに日本文学大辞典縮冊版八九頁と国語学辞典六二二頁の区分を基準として分けた。

⑫ 同書一五〇頁のルビ（例之ば）からすれば、おそらく「たとへば」と訓んだのであろう。

引用文 献

用例は、校訂の厳密さと同時に、入手しやすい本よりとりました。漢数字は以下のもの頁数を示します。

(大系) 日本古典文学大系、文庫1岩波文庫)

大鏡(大系) 平治物語(大系) 平家物語(大系) 教行信証・開目抄(大系、親鸞集日蓮集) 近代秀歌・無名抄・毎月抄・風姿花伝・拾玉得花(大系、歌論集能楽論集)

吾妻問答(大系、連歌論集俳論集) 知連抄(文庫、連歌論集上) 舞の本(幸若舞曲集、第一書房) 毛詩抄(文庫)

盲杖・反故集(大系、仮名法語集) 鑑草、鉄眼禅師飯字法語、葉隠、町人書、鞍台雑話、役者論語、道二翁道話、古事記伝、雲華雜志(以上文庫) 關東事始(大系)

橘翁道話、武道初心集、講孟余話、文明論之概略(以上文庫) いらつめ0号、12号所載「浮雲」批評(二)

葉亭四迷全集1) 福翁自伝(文庫) 三太郎の日記第貳(阿部次郎選集、羽田書店) 惜しみなく愛は奪ふ、敷枯子集(以上文庫) 柳の種(小山書店) 地図を眺めて(文庫、寺田寅彦隨筆集卷五) 現代日本の思想(岩波新書)

(豊田工専講師)

愛知県半田市における

サ行四段式活用動詞のイ音便現象と

はじめの二音節を高く発音する

(○○○○)型アクセントについて

近藤政美

- 一、はじめに
- 二、はじめの二音節を高く発音する(○○○○)型アクセントについて
- 三、サ行四段式活用動詞のイ音便現象
- 四、はじめの二音節を高く発音する(○○○○)型アクセントの生じた原因について
- 五、むすび

一、はじめに

愛知県半田市、ここは知多半島中央部の東海岸に位置する。西は半島を縦に走る丘陵を背にし、東は衣が浦湾を臨む商工農業の混在した小都市である。江戸時代以前から海上交通により西三河との往来が頻繁であったが、最近では国鉄武豊線や名鉄河和線の開通によりあらゆる面で名古屋の影響をより多く受けるようになった。

この地方にははじめの二音節を高く発音する(○○○○)型という珍らしいアクセントがある。小稿はこの地方の

生粋の農民やその子供たちのことばを中心に調査し、周囲に生活している人々のことばをも参考にして、このアクセントの型がどんな時に現われるかを明らかにし、どのようにして生じたかを、それが生じるのに大きな原因になつたと思われるサ行四段式活用動詞のイ音便現象とあわせて考究しようとするものである。

なお、小稿では便宜上高く発音する音節を○印、低く発音する音節を○印で表わし、()印でくくつてアクセントを示すことにする。

三、はじめの二音節を高く発音する(○○○○)型アクセントについて

半田市にははじめの二音節を高く発音する(○○○○)